

新『教会通信』(2019年3月)

☆(聖書に今日を聞く)☆

伊豆イエス之御霊教会

牧師 三崎 紘

伊東市十足324-37

TEL 0557-45-3692

FAX 0557-45-7081

<http://izukogen.wonderful.to>

ハレルヤ!

◎『不義の**ことば**に我に勝てり なんじ我等の諸々の**咎**を**潔め**給わん
汝に選ばれ汝に近付けられて 大庭に住まう者は**幸い**なり
我等は汝の家なんじの宮の**潔き**処の恵みにて**飽く**ことを得ん』
(詩篇第65篇3, 4節)

※『不義の**ことば**に我に勝てり なんじ我等の諸々の**咎**を**潔め**給わん』

“不義の言葉われに勝てり”とは、神様の御前に決して正しく無い事、又そんな言葉に自分が勝利出来なかったと言う事であり、言い換えれば悪事の誘惑に負けて悪い考えを持ち悪い行為をして仕舞った、と言う事でありませぬ。

時に是は決して善い事では無い、神の御旨に反する事であるから遣ってはいけぬ、と自戒しながらもついつい其の場の流れに添って仕舞い、後悔する事も再々、と言うような人も居られるかと思われませぬ。

しかし神は、“諸々の”とありますから沢山の、或いは何時もの事ながら、そんな人(自分)を何時も何時も赦して潔めて神の子としての体面を保たせて下さった、と言う事でありませぬ。

そんな情け無い者でありながらも、神に選ばれた者達は、あらゆる教育や試練を通して、神に近付けられて参ります。

神様の御愛と忍耐とが無ければ、どんなに驕の**厳**しい名家の生まれであれ生まれ付き立派な人間性を持ち合わせていても、天地萬物の創造主であり天上天下に唯一の神様に近づく事など、百億人に一人と言えども人間には出来るものではありません。

そんな者達であっても神に選ばれた者であるならば、神のお優しさに幾度か触れております内に、神のご存在とその御愛に気付く時が必ずあり、やがて神のご愛の中でしっかりと其の御心を悟り、神の御前に謙って悔い改めの謝罪をして信仰のけじめを付ける日がやって参ります。

※『汝に選ばれ汝に近付けられ 大庭に住まう者は**幸い**なり』

主に選ばれて主のご恩寵の中に育てられ近付けられる者は、此の地上に在っては、常に神の祝福の御手の中に置かれて、天地萬物の所有者であられる神の**貴**き聖名の**栄光**を**顕**す者として用いられます。

神と共に歩む新しい生活が始まります。

※『我等は汝の家なんじの宮の潔き処にて飽くことを得ん』

やがて時は移り変わり、永遠の生命が約束されて、神の御住まいであります神の国へと携え挙げられて、神の家族の一員としての境遇を享受させて戴ける日が参ります。

此等の事柄は、苦渋の人生の中から出て来た夢物語ではありません。

天地萬物を創造なされた御方が存在して居られるか、否かが問題の始まりであり思考の原点であります。残念ながらそんな議論は全く何の意味も持たない事を、神ご自身が聖書の中で明確にその御意を顕しておられます。

◎『世の創の前より我等をキリストの中に選び、
御意のままにイエス・キリストに由り
愛をもて己が子となさんことを定め給えり。』

(エペソ書第1章4,5節)

愚かな私達の頭では、どのように考えても此の“世の創の前より”とのお言葉の時期を正確に理解するのは困難ではありますが、私達が住まう地球をお創りになられた神様がそう仰有っておられるのですから、人類が現れるずっと前から、神は人間の中から神の子供になる者達を選んでおられた、と言っておられるのであります。

神の子供と決められた事は、決定事項であります。

後に生まれ現れた私たち人間が、その事にとやかく言葉を差し挟む事は赦されません。

しかし、凡ての人々は言うでしょう。

それが本物の神である、とどうして言えるのか？

その質問にお答えするのは簡単な事ではありますが、それを貴方に理解させるには真の神に付いて語る者を貴方の処に届けなければなりません。

◎『信仰は聞くにより、聞くはキリストの言による。』

(ロマ書第10章17節)

◎『然れど未だ信ぜぬ者を争で呼び求むることをせん、
未だ聴かぬ者を争で信ずることをせん、
宣傳うる者なくば争で聴くことをせん。』

(ロマ書第10章14節)

信仰は、キリストの聖言を聞く事から始まります。

しかし今日まで知らなかった神を、どうしたら呼び求める事が出来るのでしょうか？ 是まで聴いた事も無かった神様をどうしたら信ずる事が出来るのでしょうか？ その事を宣べ伝えてくれる者が居なかったら、どうして聴く事が出来るのでしょうか？

全く、その通りであります。

神様が生きておられる事、その神様が自分の事を愛し育てて下さった事、常に自分を見守って、様々な問題が起こる度に何時も何時も智慧と能力を与えて援けて下さった事、肺癌や胃がんに罹った時にも治療に当たった医師が驚く不思議な癒され方をした事などを語って呉れる、貴方に遣わされる者がいなければ、貴方の心は開かれないでしょう。

本当の神様の福音を聴くと言う事は、そんなに簡単な事ではありません。

私が勝手に、難しくしているのでは無いのです。

その説明をさせて頂く前に、私たちの神様は“霊”の御存在で在られる事をご理解下さい。その上で申し上げます。

◎『御子(イエス・キリスト)の福音に於いて我が霊をもて事うる神は、わが絶えず祈のうちに汝らを覚え、如何にしてか御意に適い、いつか汝らに到るべき途を得んと、常に冀がうことを我が為に証し給うなり。われ汝らを見んことを切に望むは、汝らの堅うせられん為に霊の賜物を分け与えんとてなり。』

(ロマ書第1章9～11節)

此の文章は、神の福音を語る役目を負っている“我(使徒パウロ)”と、常日頃から福音を語って聞かせて上げたいと切に願っている相手、“汝ら”との現実的距離感と、如何にもして面会が適い福音を語り、“汝ら”の心が開かれて神の有ち給う“霊の賜物”を分かち与う事が出来たらどんなに幸いな事であるか、その事を真心から願っている事は神が証明しておられる、と語られた聖言であります。

天地創造の神を唯一神として信じ崇める此の信仰は、神の御心が働いて下さらなければ何事も始まりませんし、前進致しません。

前述しました◎『世の創の前より我等をキリストの中に選び』とありましたが、末世である今日、永遠の生命を与え永世を偕にする神の子を選び出すのに、神が関与なされる事は当然であります。

実は、神の子供として誰が選ばれているのか、此の事は神のみが知る所であり、福音を語る者にも解りませんし、聴かされる者にも自分が神の決定事項に該当しているのかどうか事前には解りません。

マタイ傳第13章24, 25節に

◎『天国は良き種を畑にまく人のごとし。

人々の眠れる間に、仇きたりて麦の中に毒麦を播きて去りぬ。』

麦畑の農夫達が毒麦を見付けて、主人に“私達が抜きましようか？”と聞きますが、主人は“否、毒麦を抜こうとして良き麦も一緒に抜いて仕舞う事があるから、今はその儘にしておけ。やがて収穫の時が来たら、毒麦は焼く為の束にし、良い麦は倉の中に納める”と言われました。

マタイ傳第22章には、或る王様が息子の婚筵の席に招待した者達が、多忙を言い訳にして出席を断る者が続出し、それでも尚、誘いを掛けると王の使者達を捕らえ辱め、遂には殺して仕舞いました。

そこで王様は◎『されば汝ら街に往きて、遇うほどの者を婚筵に招け』と、街に出て行き交う者達に声を掛けて、婚礼の席を満員にしました。

王が客席を見渡しますと、礼服を着用していない者がおります。

王は怒りました。◎『その手足を縛りて外の暗黒に投げいませ』

その結末には◎『それ招かるる者は多かれど、選ばれる者は少なし』

此の二つの聖言から導き教えられる事は、末の時代、聖書に忠実に従おうとする教会であっても、其処に集っている者達の総てが神の子に相応しい者達であるとは、限らないと言う事であります。

神の国へと招かれる“御救い”と言う事だけでありますならば、ユダヤ(イスラエル)人達には神との間に“選民”としての約束があり、ロマ書第11章29節に記された◎『それ神の賜物と召とは変わる事なし』とありますように、神は一旦お決めなされた事を自ら否定する事を為さらない御方であられます。(テモテ後書第2章13節参照)

そこで我ら異邦人と呼ばれる者への御救いは、目的の最高とする“神の子、即ち神の家族の一員”を目指すべきであり、ヨハネ傳第3章5節に於いて、夜、主イエス様の御許を尋ねて来たユダヤ人の宰ニコデモ氏に主が仰有った聖言は、その目的への絶対的な条件であります。

◎『人は水と霊とによりて生まれずば、神の国に入る事能はず』

是ほど明確な聖言を以て、主イエス様ご自身が仰有ったのでありますが、世的な教会では此の神意を悟るには至らず、御救いに拘わる最も重要な聖言としてヨハネ傳第10章の“羊の門”と言う抽象的な聖言を“救いの門”として勧めている所も有るやに聞き及びます。

確かに、◎『我は羊の門なり』(ヨハネ10:7)との聖言は間違い無く主イエス様のお立場を顕しておられます。

主イエス様は此の後、あの十字架にお掛かりになられ、その主イエス様を信ずる者に我ら異邦人をも含めて“永遠の生命に至る道と門”を開く為に、自らのお生命をお棄てになられたのであります。

聖書には、神を信ずる者は“羊”と呼称され、神はその羊を養い育てる大牧者であられます。

そこから◎『我は羊の門なり』と仰有った聖言に矛盾はございません。

しかし、ヨハネ傳第3章5節の『水と霊のバプテスマ』と言う“御救い”に関する真理の聖言を無視して、抽象的な『羊の門』から這入らなければ『盗人なり、強盗なり』と言われても、意味不詳となって参ります。

“水と霊”に付いては、“水”は主が十字架でお流し下さった御血潮であり、イエスの聖名に依る全身浸礼を、施す者も施される者も共に水に這入ってバプテスマを行う時、その者は主の死に合うバプテスマを受けた、とは聖書に詳しく記された指導記事であります。(ロマ6:3他を参照)

また“霊”とは、◎『神は霊ならば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり』(ヨハネ4:24)と、主イエス様はサマリヤのご婦人に語っておられ、私たち神に向かって礼拝を為す折は、真心を以て又イエス之御霊を以て祈れと言われておられます。

イエス之御霊を以て祈ると言う事は、初代教会に於いては極めて当たり前の事で、霊言=異言を以て主の御霊の執り成しの中に祈る禱りこそが真の祈禱であります。(ロマ8:26他を参照)

イエス之御霊を受霊した者でなければ、神に対する真の礼拝をお献げする事は出来ません。(コリント前14:2など参照)

人間の耳には聞き慣れない異言(霊言)での礼拝に始めて参加した未信者の口から、此の教会は異端であるとか、気が狂った者達の集団である、と言う言葉を聞く事がありますが、コリント前書第14章23節には、現代、実際にイエス之御霊教会に起こるその儘の事が記されております。

◎『もし全教会一処に集れる時、みな異言にて語らば、

凡人または不信者いり来らん、汝らを狂える者と言わざらんや。』

世の中に多数存在する基督教会は一応、聖書を教典としており、上記等の聖言に自称牧師を名乗る者達は日常的に接している筈であります、教団と言う養い処の顔色を窺う彼らには、取り立てて諍う必要を感じ無いのかも知れません。

我らは、唯一の神・天の父なる神の御心を付度する者ではあっても、人の顔色を窺う者ではありません。

此の御救いと教えは、ユダヤ(イスラエル)人から始まっております。

聖霊降臨は、使徒行伝第2章に記されておる如くに、ユダヤ人にとっては大変な式典である五旬節の日に起こりました。

中近東や北アフリカに移住しているユダヤ人の同胞らの多くが、エルサレムに帰って来ており、エルサレムの街中はまるでコスモポリタン(世界は一つとする思想と主義者)的な様相を呈しておりました。

その最中、十字架の死から復活なされた主イエス様を信じたユダヤ人と使徒達を加えた約百二十名が、主のお言葉に従って一カ所に集まっている時、突如として各人の上に聖霊が降り、皆が御霊の宣べしむるままに異邦の言で語り始めたのであります。

五旬節の祭に帰っていた敬虔なユダヤ人達は、一斉に異言で語る人々の語る言葉を良く聞くと、何と各国から来た者達の国語となっているのに気付き、驚きと怪訝な気持ちになり騒ぎとなります。

おおよそ15カ国の聞く者達の国語で語られ、その内容は『神の大いなる御業に付いて』(使徒2:11)語られておりました。

勿論、自国語で語られた者達に取っては驚きと戸惑いでありましたが、一方で只単に、『奴らは甘い葡萄酒を飲んで酔っ払っているだけだ』と言う大衆もおります。

そこで、ペテロを筆頭とする十二弟子達の、名説教が始まります。

『今は朝の9時であるから、酔っ払っていると云った者は間違いである。皆が驚いている此の事は、預言者ヨエルによって言われた末の世に起こる出来事が、今正に起こっているのである。』

ユダヤの人々は旧約聖書に付いては関心が深く、彼らの総てはヨエルが預言した内容を理解しました。ヨエル書第2章28節からの聖言を引証して使徒行伝第2章17節では次のように記されております。

◎『神言い給わく、末の世に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。』

此の“末の世”とは、主イエス様が地上に顕現なされ十字架の御業を成し遂げられて、新しい御救いの道が開かれた時から始まる“新約時代”の事を指しておりますが、その後の長

い^{キリスト}基督教の暗黒時代を過ぎ、二千年を経た現代は、末の世の最終段階に差し掛かった時代と言えます。

さて、それぞれの国から集まって来た彼らに◎『わが^{くに}国語にて彼らが神の大いなる^{みわざ}御業をかたるを聞かんとは』(使徒2:11)との聖言に、神は何故、初めての^{こうりん}聖霊降臨の日に、語らせた^{ことば}異邦の言(異言)の発音(発声)を、デアスポラ(パレスチナから^{りさん}離散したユダヤ人)の彼らにそれぞれの^{じこくご}自国語として聞き取れる言語と為さったのでありましょうか？

神は、神の^{せいれい}聖霊が世界の人々に注がれて、神の偉大なる^{みわざ}御業とご^{けいりん}経綸が世界の隅々にまで^{つた}宣べ伝えられる事を^{よこく}予告なされたのであります。

当然^{かんどう}みなが感動したのでは無く、或る者達は^{あざけ}嘲りの言葉を以て『彼らは^{ぶどうしゆ}甘き葡萄酒に酔っ払っているのだ』と^{たわごと}戯言としてしか^{とら}捉えていない者達も多くあった事が記録されております。何時の時代にでも、^{まこと}真の信仰に関しては同じ事が言えます。

◎『イスラエルの人々よ、これらの^{ことば}言を聴け。』(2:22)と呼び掛ける弟子達の、ヨエル書また詩篇の^{よげん}ダビデ王の^{もとい}預言を^{すす}基とした^さ勧めを聞いたユダヤの人々は、自らの民族が主イエスを十字架に^か掛けた事を^{してき}指摘され、心を^さ刺され(2:37)た思いで使徒たちに問い掛けます。

◎『我ら何をなすべきか』 その問いにペテロが答えます。

◎『汝ら^く悔い^{あらた}改めて、おのおの^{つみ}罪の^{ゆる}赦しを得んために、

イエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、
然らば^{せいれい}聖霊の^{たまもの}賜物を受けん』

ユダヤ人は、その昔、天地創造の神から選ばれた民族であります。

◎『其は汝は汝の神エホバの^{きよきたみ}聖民なればなり 汝の神エホバは
地の^{おもて}面の^{もろもろ}諸の民の中より汝を^{えら}撰び己の^{おのれ}寶の^{たから}民となし給えり』
(申命記第7章6節)

選びの民であり、やがて神の国へと召される約束の民族でありました。

旧約聖書に記載された登場人物には、ヤコブやモーセ、ダビデと言った^{そうそう}錚錚たる^{めんめん}面々が居られますが、彼らは神の^{せんみん}選民ではありますが、特選の民(テトス2:14)ではありません。

関連して、ヘブル書第11章39,40節にこのように記されております。

◎『彼等はみな信仰に^よりて^{あかし}証せられたれども約束のものを^え得ざりき。

これ神は我らの為に^{まさ}勝りたるものを^{そな}備え給いし故に、
彼らも我らと^{とも}偕ならざれば、^{まつと}全うせらるる事なきなり。』

彼らとはユダヤ民族であり、我らとは、“水と霊”の^{まつた}全き^{みすく}御救いを^{そな}備えして^{いただ}戴いた私達のことであり、ユダヤ人も“水と霊”を受けなければ、神の子となる最高の御救いを^{みすく}全う^{まつと}する事は出来ないのです。

主イエス様は、ルカ傳第7章28節でこのような事を言われております。

◎『女の^う産みたる者の中、ヨハネ(バプテスマの)より大いなる者はなし、
されど神の国にて^{まさ}小さき者も、彼よりは^{まつと}大いなり。』

母親(肉)から生まれた者の中では最高の存在であるバプテスマのヨハネであっても、神の国では、“水と霊”のバプテスマを受けた^{まさ}小さき者の方が、受けていない彼よりは^{まつと}大きな存在であると言っておられます。

さて、今号では、事細かに“御救い”に関する事を述べて参りました。
目的が不明瞭なままに神を信ずる信仰に傾注しても、結果に確信が持てなければ如何なものでしょうか？
憐憫に富み給う主イエス様に心から感謝申し上げます。 ハレルヤ！

(2019、3、1 伊豆イエス之御霊教会 牧師 三崎 紘 文責)